

〔大鏡^三

太政大臣頼忠

太政大臣頼忠

故中務宮よしあきらのみこの御むすめのはらに、御むす

め二人、男一人おはしまして、おほひめ君子[○] 遵は圓融院の御時、女御にて中宮と申しき、御年廿六

略[○] 註みこむまれおはせず、四條の宮とぞ申めりし、[○] 中かの大納言殿[○] 藤原無心の言一度、その

たまへるや、御いもうとの四條の宮、后にた、せ給ひて、はじめて内へ入りたまふに、西洞院のぼ

りにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給ふに、大入道殿[○] 藤原兼家も故女院子[○] 詮もむねいた

くおぼしめしけるに、按察の大納言殿^任 公は後の御せうにて、御心ちよくおぼされけるま、

に、御馬をひかへて、この女御子[○] 詮は、いつか后にたち給ふらんと、うち見入れて、のたまへりける

を、殿をはじめたてまつりて、御ぞうやすからずとおほしけれど、おとこ宮[○] 一おはしませばた

けくぞ、よその人々も、やくなくも、給ふかなとき、給ふ、一條院位につかせ給へば、又女御后に

た、せ給ひて、内に入り給ふに、この大納言殿、啓のすけにつかうまつり給ふに、出車よりあふぎ

をさし出して、や、物申さんと、女房のきこえければ、何事にかとて、うちより給へるに、辨の内侍

かををさしだして、御いもうとのすはらの后は、いづくにかおはすると聞えかけたりけるに、

先年の事をおもひおかれたるなりけり、みづからだにいかにとおぼえつる事なれば、道理なり、

なくなりぬる身にこそとおぼえしかとの給ひけれ、されど人がらよろづに、よくなり給ひぬれ

ば、ことにふれてすてられ給はず、かのないしのが[○] とが[○] 原作おなるにてやみにき、

〔十訓抄^十〕大江公資大外記を所望しけると、僉議有て拜任よろしかるべきよし、諸卿定め申さ

れけるに、彼おと[○] の[○] 實資[○] 藤原意見に云、公資は相模を懐抱して、秀歌案せんほどに、公事を闕如云

云、人々わらはれけり、其詞によて本意をとげず、度々かやうの事有けるにや、相模は冷泉院御時

の一品宮の女房の名乙侍従也、公資相模守たる時の妻とするによりて、其號あり、夫婦ともに歌

よみなりけり、